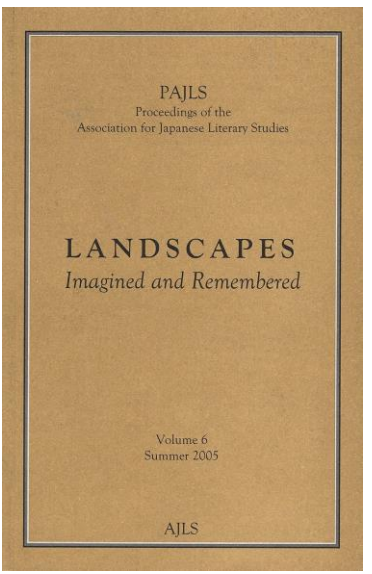
「沖縄の風景を読む—想像された風景・回顧された風景」
“Okinawa no fūkei o yomu: sōzō sareta fūkei, kaiko sareta fūkei”

Nakahodo Masanori 仲程昌徳

Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies 6 (2005): 3–12.



PAJLS 6:
Landscapes: Imagined and Remembered.
Ed. Paul S. Atkins, Davinder L. Bhowmik, and Edward Mack.

Okinawa no fūkei o yomu: sōzō sareta fūkei, kaiko sareta fūkei

Nakahodo Masanori
University of the Ryukyus

沖縄の風景を読む ー想像された風景・回顧された風景

仲程昌徳
琉球大学

ハーマン・メルヴィルとハート・クレーンの研究者だといわれるワーナー・バースオフという方の「沖縄の思い出 1945～46」（比嘉美代子訳、『琉球新報』連載 8　2002・1・29 付）を読んでいて、次のような文章に出会いました。

> 決して忘れることができないばかりか、今も鮮明に記憶に留めているのは、四六年のある夏の日に船上から眺めた沖縄の自然の比類なき美しさである。僕は那覇港から出る小さな船で島の周囲を巡ったが、文字通り沖縄の自然の美しさに圧倒された。
>
> 長期的米国軍隊の駐留、急速な近代化とそれに伴う経済拡張などで、沖縄の自然の美しさが破壊されることがないよう祈らずにはいられない。

ワーナー・バースオフが、沖縄を離れたのは「四六年の夏」。沖縄に足を踏み入れて以来、沖縄に関心を寄せ続け、「沖縄の人々の幸運を祈り、少しでもそのお役に立てるよう頑張ってきた」ばかりでなく、「帰国後は、アメリカ軍隊の継続的駐留がもたらす沖縄の悲劇的歴史に思いを馳せ、ときに困惑し、胸中が苦しくなることも」あった、という誠実さのよく表れた回顧のあとに続く、右の文章を読んで、びっくりしました。

なぜ、びっくりしたかといいますと、ワーナー・バースオフがこの短いセンテンスのなかで「沖縄の自然の比類なき美しさ」「沖縄の自然の美しさ」「沖縄の自然の美しさ」と繰り返し書いているその景色を眼にしているのが、他でもなく 1946 年当時の風景であったということです。

沖縄は、よく知られていますように、地上戦の戦われたところであります。一九四五年三月二十六日慶良間諸島に来襲、四月一日本島

中部西岸に上陸、六月二十三日日本軍の組織的戦闘が終息するまでの八十日余の戦いで、沖縄は、それこそ地上のすべてが吹き飛ばされたといわれていますし、終戦直後の沖縄に触れて書かれた文章の多くが、そのことについて触れています。

> 一九年一〇月一〇日の大空襲で、一日にして灰燼に帰した那覇市は、さらに砲弾をぶちこまれて、瓦礫の死の街と化していた。ふと東の方を向くと、見おぼえもない白い低い雪におおわれたような丘があった。私は自分の眼を疑った。緑におおわれて静かだった旧都首里の変貌した姿であった。天文学的数量の砲弾をぶちこまれて、首里城は吹っ飛ばされ、樹木は薙ぎ倒され、岩はうち砕かれて白い粉を吹いて、まるで雪におおわれているように、真白く見えているのであった。
>
> 世界に人々が、沖縄戦のこの惨状を見とどけるまでは、木よ伸びるな、草よ茂るなと、私は、さけんだ。

仲宗根政善の『石に刻む』に収められたエッセーにみられる一文です。

仲宗根には、砲弾を打ち込まれて「岩はうち砕かれて白い粉を吹いて、まるで雪におおわれているように、真白く見えている」その光景がたいそう強烈なものに写ったのでしょう。「沖縄戦かく戦えりと世の人の知るまで真白なる丘に木よ生えるな草よ繁るな」といった歌も残しています。そしてそれは、敗戦直後の沖縄について歌った典型的な一首だったといっていいでしょう。

仲宗根政善は、「ひめゆり学徒隊」を引率した教員の一人、戦後ひめゆり学徒たちの手記を集め『沖縄の悲劇――ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』を刊行した、まさしく「沖縄の悲劇」を体験なされた方のお一人で、そのような人の書かれた文章や歌を眼にしていたものには、ワーナー・バースオフの文章は、不思議に思われたばかりか、びっくりせざるを得ないものでありました。

言ってみますと、敗戦直後の、荒廃した沖縄の自然のどこが比類のない美しさに輝いていたのか、といったある種の怒りを覚えさせるものでもあったわけでありますが、冷静に考えてみますと、戦火の及んでなかった地域は確かにワーナー・バースオフのいう通りであったといえるでしょう。そしてそのことは、沖縄が、本当に美しい島であったということを証していたかに思えます。

敗戦直後の沖縄を、船上から眺めたワーナー・バースオフは、沖縄の自然の美しさを比類ないものと讃えていましたが、どのような自

然が彼の目の前には広がっていたのでしょうか。ワーナーの文章からそれを窺うことは出来ませんが、それは、次の様なものではなかったでしょうか。

１、海上から見ると同島の海岸は緑で美しく、極めて鮮やかな緑色の森や畑があって様々の色を呈していた。雨のためにその風景の色彩は輝きを増し、それは私の心に極めて豊かなイギリスの風景を思い出させた。

２、最後の二日間は烈しい大強風が吹いた。だがその風も鎮まって、私達は珊瑚礁を越えて碇泊所へ入ることが出来た。それは夜明け頃に済んでしまったので、私は眠っていて、何も知らなかった。私は甲板へ出た。すると海岸は忽然として、もう仕上げの済んだ完全な絵となり、思うがままに切り刻んだ美しい線となりあらゆる魅惑的なデテールを持ち、色と光に包まれて見えるのであった。

１は、ペルリ提督『日本遠征記』に見られるもので、沖縄に向かうサスクエハンナ号に中国で乗り組んだ有名な旅行家バヤード・テイラーの手記からの引用、２は、ゴンチャロフの『日本渡航記』に見られるものであります。

テイラーのは一八五三年、ゴンチャロフのが翌一八五四年、沖縄に来航した際の見聞を書いたものでありますが、ワーナー・バースオフが船上から見た景色も、テイラーやゴンチャロフのみた景色と大差ないものであったといっていいのではないでしょうか。

沖縄に来航してきたものたちの眼に映った沖縄の自然は、そのように比類のない美しさに輝いたものであったわけですが、では、沖縄の人たちに、沖縄の自然はどのように写っていたのでしょうか。彼らは、自然とどのように対したのでしょうか。また彼らは、そこに何をみたのでしょうか。それを知る上での最もいい方法はといえば、他でもなく、沖縄の作家たちが書き残した文章を見ていくことでしょう。

３、おそろしく荒れた暴風雨（あらし）はやんだ。――
急にあたりのようすが、深い谷底のように沈んでしまった。海岸には檣（ほばしら）の折れた山原船が一艘、あさせにのりあげて、その赤く塗ッた船尾の板が真ッ二つにわれたまゝ傾いていた。真ッ白な貝がらのちらばッている砂浜には、こわれた雲丹（うに）の殻、死んだ赤蟹の甲、いそぎんちゃくの屍などが飴色の藻草にからまッて、あち

らこちらにさんをみだしていた。そこには難破船をとりかこんで人がいッぱいであった。それらのすべてをてらしている太陽の色は、ちょうど灯油のような冬らしい弱い光の波を、うすい浅黄の空いちめんにたゞよわせていた。

嵐のやんだ海のおもては、却ッて濃い藍青に凪いで、しずかに白い海鳥の群がひくゝ波の上をとんでいた。はるかあなたには、海と空の色がおだやかにとけこんでいる。

二日のあいだというものは、夜も昼も、やすみなく嵐と雨がいりみだれて叫び狂った。そうしてやんだのが三日目の朝である。ちょうど黄いろな芭蕉の帷子が藍縞の単衣に更ッて間もない旧暦十一月のはじめ、島でも朝晩はうすらさむい頃である。

海に近い、さびしい南国のN町は、そのしずんだ空気の裡に琉球特有の潮風にふきさらされた、梯梧だの、ゆうなだの、割合に薄ッぺらな木の葉は土器色にちゞこまッて、まだ薄黒く湿りをおびた裸の幹がならんだ。それでも、福木、がじまる、蘆薈、棕櫚、檳榔といッたような、亜熱帯植物の、くらい緑青をおびた陶器みたいな厚ぼッたい葉は、枯れないかわりに、うすじろく塩をふいていた。

（山城正忠「九年母」『ホトトギス』1911年）

４、榕樹、ピンギ、梯梧、福木などの亜熱帯植物が亭々と聳え、鬱蒼と茂り合った蔭に群がった一部落。家々の周囲には竹やレークの生籬が廻らしてある。その家が低い茅葺で、穢しい事は云う迄もない。朝、男達が芋や網を持って田圃へ出掛けて行くと、女達は涼しい樹蔭に筵を敷いて、悠長で而かも一種哀調を帯びた琉球の俗謡を謡いながら帽子を編む。草履を作る。夕暮になって男達が田圃から帰って来ると、その妻や娘達が、捕って来た蛙や鮒を売りに市場へ行く。それをいくらかの金銭に代えて、何か肴と一合ばかりの泡盛を買って、女達はハブに咬まれないように炬火を点して帰って来る。男達は嬉しそうにそれを迎えて、乏しい晩飯を済ますと、横になって、静かに泡盛を啜る。

(池宮城積宝『解放』「奥間巡査」1922年)

３は、山城正忠の「九年母」からの引用、４は、池宮城積宝の「奥間巡査」からの引用であります。

山城、池宮城の名前が出たついでに、ここで、沖縄の文学について、簡単に紹介しておきたいと思います。岩波の『日本文学史』第十五巻をのぞかれたかたはお気づきになったかと思いますが、第十五巻の表題は「琉球文学、沖縄の文学」といった表題になっています。なぜそのような表題になったかといいますと、沖縄の文学は、大きく琉球方言で表現された作品、琉球文学と共通語で表現された作品、沖縄の文学とに分けられるからであります。沖縄が日本の一県になったのが明治十二年、一八七九年。いわゆる琉球処分・首里城明け渡しによって沖縄は琉球王国から日本の一県へと大きく変わっていくことになりますが、それはまた方言表現から共通語表現への移行という表現言語の転換をももたらさざるをえないものでありました。

そこで琉球処分以前の方言表現になるおもろ、琉歌、組踊り、歌劇等の作品群を指して「琉球文学」、処分以後の共通語表現になる作品群をさして「沖縄の文学」として区分しているわけであります。

「琉球文学」についての説明は割愛させていただきますが、ここで、共通語表現になる小説作品の初発、すなわち「沖縄の文学」の出発を誰の作品に求めるかという問題がでてくることになります。

沖縄文学の出発をめぐる論議はたぶんこれから始まっていくのではないかと思われますが、今のところは、山城正忠の「九年母」を沖縄近代小説の出発点にすえる考え方がとられています。

正忠の作品は、中央文壇で初めて大きな話題を呼んだ沖縄の作家の小説でもありました。作品の時代背景は、日清戦争期、作品内容は、沖縄を救援するために中国の黄色艦隊がくることになっているが、その派遣費が必要だというので、中国派の領袖を巻き込んで金を集めた小学校の校長が、詐欺のかどで逮捕されるとともに、中国派の領袖も世の嘲笑の的になってしまうというものです。それだけでは、分りにくいかと思われますが、処分前の琉球王国は日清両属といった形態をとっていたため、日清戦争期まで、沖縄では中国派と日本派とに別れて、まだ争っていたということがあったのです。

「九年母」が、中央文壇で好評をもって迎えられたのは、その内容にあったのではなく、「ローカル・カラー」がよく現れているという点にありました。それは引用した文章からでもある程度おわかりいただけるかと思いますが、あと一点、会話の部分に、琉球方言を取り入れていたということもありました。亜熱帯植物の繁茂する風景とともに、そこに住む人々の言葉が巧みに取り入れられ、一段と地方色を引き立てて評価の高かった作品でありますが、沖縄の読者にはあまり

受けたようにはみえません。とりわけ、その方言使用が槍玉にあげられました。

明治期を代表する「沖縄の文学」ということになれば、やはり正忠の「九年母」をあげることになるのでしょうが、大正期を代表する作品といえば、間違いなく池宮城積宝の「奥間巡査」をあげなければならないでしょう。

「奥間巡査」は、一九二二年『開放』に掲載された作品。奥間百歳という貧しい村の男が、巡査になるが、他府県出身者の多い職場では異邦人視され、村人からは疎外され、慰安を求めて遊郭に上ったところ、そこで働く女に引かれ、結婚を約束、朝彼女の所から帰る途中、不審な男を見付け連行、上司は彼の初手柄を喜ぶとともに尋問の結果、男には妹がいるので、妹を連行してくるようにと命じられるが、その妹が、実は彼が結婚を約した女であったことで彼は憤怒で狂ってしまうというものです。行き場を失ってしまった男の悲劇を描いたものでした。沖縄の近代化過程で、新しい時代に目覚めたものたちの遭遇せざるを得なかった問題を描き出したものです。

明治・大正期を代表する沖縄の小説に描きだされた自然は、まず猛威を振るう自然でありました。沖縄が「台風銀座」と呼ばれるようになるのは、いつごろからか、よくわかりませんが、「台風」は、沖縄の風景を彩るものとして、近代小説の初発を飾った作品から登場していたのです。そしてそれは、小浜清志の秀作「風の河」を生むことになっていきます。

「九年母」の「台風」は、沖縄の帰属が問われて人心をこの上なく動揺させた時代をよく彩っていたともいえるものでした。また、「亜熱帯植物が亭々と聳え、鬱蒼と茂り合った」「奥間巡査」の自然は、台風から貧しい村を守るためのものとしてあるとともに、時代に取り残された村の様子を指し示す形にもなっていました。

小説の背景をなす自然描写は、そのように人心の動揺や、村の貧しさを指し示すかのようして描き出されていたといっていいかと思いますが、では昭和戦前期の作家は、沖縄の自然をどのような形で描いていたのでしょうか。

５、夏、琉球の片田舎を旅行する人々には楽しい情景の一つだが、琉球の百姓だちはよく垣根の下の道路の上に莫蓙を持ち出してお茶を飲んでいる。日中の屋内は堪らないからである。榕樹や福木の鬱蒼と茂り立った垣根のビルジングとビルジングの間は、そこだけに風が生き残っているかのように、時々微風が肌を撫でて通る。百姓だちはそこで肌脱ぎになって殆ど半裸体の姿でお茶をの

んでいるのである。中には褌一本で寝転がっているのも珍しくない。女だちは偉大な若しくは干からびて乾魚のようになった乳房をぶら下げて芭蕉糸など紡いでいるが、流石に娘だちだけはたとえ肌脱ぎになっても、着物の袖と袖とを乳房の上でぎゅっと結びつけ、僅かに肩先だけを覗かせているに過ぎない。彼女だちは大抵真白な顔をしてパナマ帽を編んでいる。この垣根の下の休息は殆どあらゆる家の昼食後の日課になっているので、その時刻に道を通る村人だちは五町も行くうちには何べんとなく立ち止まって挨拶をしなければならない。
（與儀正昌「顛末」『文学界』1935 年）

６、時々青空が見えた。綿屑の様な白い雲がキラキラと光を放って、足の速い雨雲の裂け目に姿を現す事があった。こんな日には東の海（太平洋）から西の海（東支那海）へ、屹度一群の渡り鳥が鳴いて飛んで行った。そして、さわさわと、乾燥した甘蔗の葉の波音さえ聞こえて来るのだった。家の中には蒸し暑い上に蝿がどっと出て、鍋や釜の上から、内職の帽子編みをしている父の背中迄、黒々と止まっていた。母は木蔭へ盥を持ち出して洗濯にかかった。母の目の前で、飛石からも。その上で寝ている鶏からも、ゆらゆらと陽炎が立ち上っていた。
（石野径一郎「梅雨季前後」『作家群』1935 年）

５は、一九三五年、川端康成の推薦で『文学界』に発表された與儀正昌の「顛末」にみられるものです。「顛末」は、村に入った山師にだまされ、地位も財産も失ったばかりか、「癩」に冒され自殺してしまう男を描いたものであります。降って沸いたような鉱山の話が、今まで眠っていたような村を騒乱に巻き込んでいくそのさまは、いわゆる資本主義の暴力とでもいえるさまを、まざまざと映し出していたといっていいでしょうが、ここに描き出されている自然は、まだその暴力に曝される以前のものであります。それは、侵入される自然というかたちでもありました。

６も同じく一九三五年『作家群』に発表された石野径一郎「梅雨季前後」からの引用であります。首里から田舎に都落ちした一家の少年が、再度首里へ登りたい（移り住みたい）と考えている一家の期待を担って、勉学のため田舎を出ていくというものです。貧しい田舎の風景がそこには、描かれていたわけですが、それは、見捨てられていく風景といったかたちで描かれていたといっていいでしょう。

もちろん、そのような風景は、単に貧しさや、見捨てられていく風景としてあっただけではなく、故郷を離れていったものたちに懐郷の情を沸き立たせてくれるものであったことも、これまた宮城聰の「故郷は地球」といったような「出郷小説」の幾つかに見られるものです。

明治・大正・昭和戦前期の小説に描かれたそのような自然は、これまた外来者たちにとってこの上なく美しいものとして写ったのですが、その多くは、沖縄戦によって大きく変わってしまいました。しかし、海上から見る風景は、最初に紹介いたしましたように、まだ美しいものがあったわけですが、それもそのままというわけにはいきませんでした。

７、孫氏は、未亡人らしい中年のメイドを通いで使って、ひとりで住んでいた。官製の基地住宅（ベースハウジング）でなく、この三年ほど前から沖縄の企業化たちが争って建てた外人向け貸し住宅地帯のひとつであった。五百棟ほどもあろうか、丘陵にはいあがる形に建ちならび、業者が思い思いに塗った壁の色はとりどりで、塗料をいくら塗っても中身のコンクリートの地肌がのぞける感じが、遠くからながめると索漠たるものを帯びているが、車をいれてしだいに登っていくと、それがむしろ部落の柵がないこととあいまって、基地住宅と違ったリベラルな雰囲気をおしだしていた。孫氏のハウスは、そのずっと上のほうにあり、車をおりてふりむくと、真青な海のひろがりと海沿いにひと筋白くよこたわるハイウェイとが、油絵のように眼に痛かった。
（大城立裕「カクテル・パーティー」『新沖縄文学』1967 年 2 月）

８、いなかの炊煙でまっくろのなった蝿帳やたんすや、垢よごれた布団蚊帳をトラックにつんで、明ら昼の軍用道路を走って、町へ移動してきた時には、ぼくは気恥ずかしくてならなかったなあ。なきわらいの時のようなおかしさと悲しさがあったよ。飛行機の発着もできるように作った、と皮肉られた軍用道路をアメリカ女が運転する乗用車が走っていたし、島の人たちをつめこんだバスも通っていた。
道路の両側には、横文字の看板が並んで、スーベニア・ショップだとか、レストランだとか、ホテルだとか…道路には音楽が流されて、兵隊たちが歩きながら手舞い、足舞いしていたよ。
（東峰夫「オキナワの少年」『文学界』1971 年 12 月）

９、赤、青、緑色、種々の色のネオン看板、タテ、ヨコ、ナナメ書きのネオンの看板がしきりに点滅している。歩道の敷石にもそれらの色彩はぼんやり落ちている。等間隔に植えられたシュロの黒い葉陰が静止しているのになかなか気づかない。タクシーや高級外車がぎっしり駐車している。（資料３－４）
（又吉栄喜「ジョージが射殺した猪」『文学界』1978 年 3 月）

７は、大城立裕「カクテル・パーティー」（『新沖縄文学』1967 年 2 月）、８は東峰夫「オキナワの少年」（『文学界』1971 年 12 月）、９は、又吉栄喜「ジョージが射殺した猪」（『文学界』1978 年 3 月）に見られるものです。大城の「官製の基地住宅（ベースハウジング）」「外人向け貸し住宅地帯」、東の「軍用道路」「横文字の看板」、又吉の「高級外車がぎっしり駐車している」いる風景は、他でもなく、戦後沖縄の風景であります。

沖縄の風景が、大きく変わってしまったのは、他でもなく、アメリカ軍の進駐によって、沖縄の基地化が進んだことによるものでありますが、しかし、戦後の沖縄の大きな変化は基地によるばかりではありません。

10、少年時代の思い出をたどりながら大井川橋から出発して長浜までやって来た。
わずか五、六〇年の間に、今帰仁の海はいちじるしく浅くなった。入江が干潟になり、干潟から潮が後方へひくにつれて、村人たちは次第に海に遠ざかり、ついに海を忘れてしまった。今帰仁は、もっと海を深く抱きかかえていたのである。（中略）
山についてはふれなかったが、宿道の沿線にヤマアジマーがあることによって察知出来るように山をもっと近くに感じ、山に親しみ山を愛し山をほこっていた。（中略）
遺憾ながら、今帰仁の自然は美しくなったとはいえない。松並木はほとんど枯れてしまった。しかしそれでも沖縄でもっとも美しい自然に恵まれた村である。
近時、自然環境の破壊が急速に進んでいる。これから五〇年後の変化は予測もしがたい。静かなイノーにも公害が及び、長く生きつづけてきた無数の生物も死の恐怖におののいている。海ばかりではない。山も丘も野も。
東長浜貝塚は土地ブローカーによって無惨に破壊された。一坪の米軍基地もないと誇っていた今帰仁は、本土資本のあらたな「鉄

の暴風」にさらされている。自然の調和は乱されつつあり、教育公害は広がりつつある。
（仲宗根政善「わが故郷今帰仁」『今帰仁村史』1975 年、『石に刻む』1983 年）

沖縄の自然が、この半世紀でいかに変わってしまったか、そしてそれがなにゆえにそうなったかが、見事に活写されているかと思われますが、沖縄の自然は今、米軍基地や土地ブローカー、そして自然との触れ合いを大切にしない教育によってだけでなく、沖縄振興という名の政府の「恩典」によって、見るも無惨な姿になりつつあります。

「沖縄の思い出 1945〜46」を書かれたワーナー・バースオフも「長期的米国軍隊の駐留、急速な近代化とそれに伴う経済拡張などで、沖縄の自然の美しさが破壊されることがないよう祈らずにはいられない」と書いていましたが、沖縄の自然の消失に心を痛めないものはいないのではないでしょうか。

ご静聴ありがとうございました。